

清川村立緑中学校

研究テーマ：課題解決学習における個別最適な学びの実践

1 実践の目的

この研究テーマは「小規模校の利点を生かした指導方法等の工夫・改善に向けて、積極的に取り組み、すべての生徒が学力を身に付ける」という考えのもとに設定されている。

研究テーマに迫るために、「学習者がどのように学習を進めるか」、「学習者がどのようなつまずきをするか」、「授業者は学習者にどのような手立てをするか」といった視点をもって、各教科で単元構想を練った。

2 実践の内容

4月の研究全体会では、今年度の研究の構成を確認した。さらに、9月に研究授業を行う教科について話し合い、今年度は数学科の授業に決定した。

5月の授業研究会では、研究授業科目にあたる数学科の学習指導要領をもとに、評価の在り方について全職員で確認をした。

6月の指導案検討会では、授業者から研究授業該当学年の様子や単元計画の概要について説明してもらったのちに、資質・能力の育成にふさわしい学習課題が設定されているかについて検討を行った。さらに、その学習課題において、学習者である生徒たちにどのようなつまずきが予想されるかについて、一人ひとりの生徒の顔を思い浮かべながら検討した。

9月には、6月に出た意見をもとに修正された指導案の内容を確認しながら、再度指導案検討を行った。さらに、予想されるつまずきに対する手立ては妥当かといった視点でも検討を重ねた。

9月30日には、一般社団法人 教育環境デザイン研究所より飯窪真也先生をお招きし、数学科の授業で、研究授業を行いました。二次関数の分野のまとめとして、バスケットゴールまでのシュートの軌跡を用いた課題が授業者から提示されると生徒からは「シュートは入る!」、「いや、入らない?」、「どのような軌跡になるのだろうか?」といった声が上がった。生徒の実情に応じて個々に適した課題を選択して取り組む姿や、仲間と協働しながら学習に取り組む姿がたくさん見られた。

授業後には、指導方法の改善を進めるためには、学習の主体である生徒が、授業中に見せる具体的な姿を捉えることが必要という考えから、生徒が課題学習においてどのようなことを記述したり、話したりしていたのかという生徒の学びの実態を記録したことに基づいて協議を行った。



【課題を選択したり、仲間と協働したりする姿】

3 実践の成果と課題

今年度は、学習者である生徒がどのようなつまずきをし、そのつまずきに対してどのような手立てが有効かについて予想し、それをもとに授業改善を行うことを大切にしてきた。これは、研究授業を行った数学科だけでなく、各教科全職員で大切にしてきたことである。

今年度の研究を通して、授業者が生徒のつまずきを予想し、実態に基づいた授業改善を行うことの大切さを実感することができた。さらに、指導と評価を一体化させるための視点も欠かしてはならないことも再認識することができた。

下記「生徒アンケートの結果」では、年度初めと2学期末では微増ではありながら、肯定的な回答が増える様子が見られたと同時に、生徒自身が解決したいと思う課題設定の重要性も理解した。

「生徒アンケートの結果」

(肯定的回答の推移)

①授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか。

そう思う 43.1% → 50.0%
(年度初め) (2学期末)

②先生は、生徒一人ひとりに寄りそった指導をしてくれていますか。

そう思う 60.0% → 62.0%
(年度初め) (2学期末)

4 今後の展開

次年度は今年度の成果と反省をもとに、新たな研究テーマを設定し、研究を進めていきたいと考えている。

さらに、全職員と研究テーマの設定理由などについてしっかりと共有し、目的を明確にした上で相互授業参観や授業に関する協議を行っていくと同時に、各教科の学習と総合的な学習の時間の探究的な学びが結びつくよう、教科横断的なカリキュラムマネジメントにも努めていきたい。

今後も生徒の「主体的・対話的で深い学び」が実現できるよう、生徒の学びの実態にもとづいて指導の工夫・改善を図っていき、小規模校の特性を生かし、一人ひとりの生徒の「学びたい」という意欲を刺激し、豊かな学びを実践するための研鑽に励んでいく。



【「総合的な学習の時間」における探究的な学びの姿】



【火山岩の現物を用いて課題に取り組む姿】